

# 明治大学阿部英雄研究奨励金実施報告書

(2025年度 研究奨励金・卒業研究奨励金)

2026年 3月30日

ふりがな 氏名	小谷 怜央	所属	明治大学大学院文学研究科史学専攻日本史学専修博士後期課程
研究課題	鹿地亘の上海在留期における活動と思想 —重慶国民政府亡命への接続に着目して—		

本研究では、戦時期の日本から重慶国民政府に亡命して、対日宣伝、情報分析に従事し、日本人捕虜を動員した反戦運動を展開したプロレタリア文学者・鹿地亘（1903～1982）に着目し、特に、彼の重慶国民政府への亡命前の、1936年～37年の上海在留期の活動と思想を分析し、そこから亡命という選択へ至る過程を明らかにするものである。

鹿地亘についての先行研究は少なく、上海在留時の鹿地について触れたものも多くないが、丸山昇や呂慧君、井上桂子により、現地での活動や、晩年の魯迅との関係、『大魯迅全集』への関わりが少しずつ明らかにされてきた。

しかし、従来の研究は魯迅研究史の一端としての位置づけが中心であり、鹿地自身の活動についても、この後の平和運動への入り口という、一面的な理解に留まっている。日本の戦時体制化が進み、度重なる弾圧により転向、沈黙することになり、国外との交流が大きく制限されてしまった、大半の日本国内の知識人と異なり、自身の活動を継続し、中国左翼作家連盟所属の文学者をはじめとして、上海で多くの知識人、文化人と交流することになった上海在留期の鹿地は、この後の重慶国民政府への亡命という選択に繋がる、自身の大きな変化へと繋がる重要な過程であったと考えられる。そのため、先行研究は、鹿地が上海での活動を通じて得た主体的な経験を見落としているという課題を抱えていると言える。

そこで本研究では、鹿地の鹿地の残した執筆物から、彼の上海在留期における活動、興味関心、および人的交流を分析することで、鹿地が上海で得た経験と、亡命という選択への接続を明らかにする。これにより、戦時期の日本国内の知識人と異なる道を辿るに至った、困難な時代における思想的可能性の一端を提示することを目的とする。

本研究の遂行に際して、当初は中国、上海における史料調査を中心に計画していたが、閲覧予定だった史料が、所蔵していた個人の手元を離れ、閲覧不可能になってしまった。そのため、代替手段を模索していたところ、日中関係の悪化により、中国に渡航しての調査自体が困難になってしまった。そのため、国内での研究、調査の遂行へと計画を変更し、国立国会図書館、及び、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている、鹿地が1926年～1936年に執筆した論考と、彼がプロレタリア文化運動にかかわった痕跡を追うことができる、『プロレタリア芸術』や『戦旗』をはじめとした、プロレタリア文化運動の中で各団体が発行した機関誌を中心に調査を行った。これにより、重慶国民政府に渡航する前の鹿地について、既存の史料、先行研究と突き合わせつつ、新たな史料や先行研究を求めて調査を行うことができた。その結果、以下の2点について、新たな研究成果が得られた。

## ①「政治と文学」論争における鹿地の立場の変化

鹿地がプロレタリア文化運動の中で参加した論争の中で大きなものは、1927年の芸術大衆化論争である。ここで鹿地は文学者の主体性を主張する蔵原惟人や林房雄に対して、文学が政治、つまりプロレタリア革命に向けた教化手段でなければならないと、政治のための文学という立場を唱えていた。

「政治と文学」の問題に大きな議論を生んだ芸術大衆化論争は、全日本無産者芸術団体協議会(ナップ)の設立に際して収束していくが、「政治と文学」に再度焦点があてられたのが、1932年頃から発生した日本共産党指導部と全日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)との対立、および1934年3月のナルプ解散である。

ここで鹿地は、共産党指導部からのナルプ運営への干渉や、共産党員の度重なる検挙による活動家不足によりナルプから活動家が転出させられる状況について、非常に不満を持っており、文学者の政治活動への負担が大きすぎることに、文学者の創作活動への欲求を充足させることを主張するようになっていく。1934年3月に、鹿地によって出されたナルプ解散の宣言書「ナルプ解散について」は、時代状況、党との対立と合わせて、鹿地が文学者としての立場に寄った結果であると考えられ、鹿地がプロレタリア文化運動への参画当初、政治のための教化手段に過ぎなかった文学に対して、作家の自主性と自由を重んじる

ように、大きく方向転換していった結果であると考えられる。

なお、共産党指導部との対立の際に足並みを揃えていたものの、後に転向して日本浪漫派として活動していく林房雄とは異なり、「ナルプ解散について」投稿直後に逮捕、検挙され、1935年末に釈放され、孤独の中にいた鹿地が転向という選択肢を取らなかったもう一つの背景として、以下の②東アジアにおける文学者のネットワークが後押しした思想的可能性が挙げられる。

## ②東アジアにおける文学者のネットワークが後押しした思想的可能性

亡命前の鹿地亘についての調査を継続する中で、浮かび上がってきたもう一つの特徴は、鹿地がプロレタリア文化運動の中で、日本共産党を中心とする共産党ネットワークだけではなく、そこと重なる部分もありつつも異なる、東アジアの文学者ネットワークに属せていたことが、鹿地の亡命につながる、もう一つの大きな契機につながったと考えられる。

鹿地はプロレタリア文化運動の中で、1932年に小林多喜二の紹介で日本共産党に入党するが、それと並行して、プロレタリア文化運動が中国や朝鮮の作家たちとの交流を深めている。実際に、プロレタリア文化運動の中で発行された雑誌には、魯迅をはじめとする、中国左翼作家連盟の作家たちからの寄稿も散見されており、当時、日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)書記長として、彼らとやり取りをする機会も少なくなかったと考えられる。また、中国からの留学生と接触する機会もあり、鹿地が重慶国民政府に亡命した後に共に働くことになる詩人の馮乃超(1901～1984)は、東京帝大留学時代に、鹿地のことを見かけており、以前から知っていたことを振り返っている。

同時に、鹿地が以前からアジア、特に中国や朝鮮への視座を有していたことも着目に値する。1927年の対支非干渉運動の時からすでに、鹿地は日本の山東出兵をはじめとした、中国への帝国主義的干渉を批判しており、蒋介石の国内対応にも厳しい目を向けていた。また、植民地朝鮮にも目を向けており、三・一独立運動前の平壤を舞台にした『太平の雪』(1931年)や、当時の在日朝鮮人の苦悩を描いた『ぬかるみ』[1930年]、『公園裏の交番』[1930年]のような、文学作品において、植民地朝鮮や在日朝鮮人に関する題材を取り上げたものが散見される。他にも、植民地朝鮮における朝鮮プロレタリア作家同盟(カッパ)の雑誌への投稿も確認でき、対支非干渉運動やプロレタリア文化運動を通じて、早くから中国、朝鮮への視座を育てていたと考えられる。

このような鹿地の中国、朝鮮への視座と、中国左翼作家連盟とのつながりは、同じように日本から亡命し、共産党のネットワークに頼ってソ連へと亡命した国崎定洞や岡田嘉子のように、ソ連における弾圧や粛清に巻き込まれるという悲惨な結果とは異なる進路を、結果的に生み出したと考えられる。

本研究を通じて、国際的な共産党のネットワークに関わりながらも、東アジアという地域的な中で存在していた、文学者、芸術家たちのネットワークが、戦時期という困難な時期においても、沈黙や転向とは異なる、当時における思想的可能性を推し進める可能性を持ったものとして、検討していく価値があると考えられる。

# 明治大学阿部英雄研究奨励金実施報告書

(2025年度 研究奨励金・卒業研究奨励金)

2026年 3月 30日

ふりがな 氏名	しおばら たける 塩原 健	所属	大学院文学研究科史学専攻考古学専修博士前期課程2年
研究課題	後期旧石器時代前半期における人類の地域的環境適応—南九州地域を対象として—		
<b>【研究の目的】</b> <p>本研究は、後期旧石器時代における人類の資源利用及び環境適応を、礫石器の用途峻別を軸に再構築するものである。南九州の温暖な太平洋沿岸地域では、従来の「寒冷な環境＝狩猟中心」という後期旧石器時代像に縛られない、生業の多様性が存在した可能性が高い。特に敲石・磨石・台石といった礫石器は石器製作用具だけでなく植物質食料の加工に用いられたと考えられる。本研究では、礫石器のより詳細な使用痕分析を通じ、植物利用の実態を再評価する。</p>			
<b>【研究史上の課題】</b> <p>後期旧石器時代前半期の太平洋沿岸地域、特に南九州地域では、古本州島内でも比較的温暖な気候が想定されている。そのため、温暖地域の植生に適応した独自の生業形態が存在していた可能性が指摘されてきた。すなわち、従来の「狩猟中心」と理解されてきた当時の生業に対し、植物質食料の利用により大きな比重が置かれた生活が営まれていたと考えられる。こうした生業活動を示す物質的証拠として、礫石器の存在が挙げられる。古本州島の中心部で多く出土する敲石とは対照的に、南九州地域では磨石・台石・石皿とみられる資料が大量に出土している。このような遺物の出土状況と古環境分析の結果から、当時の人々が植物質食料に大きく依存した生活を営んでいたと考えられていた（中村ほか2002）。</p> <p>しかしながら、従来の研究では礫石器の数量ばかりが重視され、その質的な検討は軽視されてきた（阿部2023など）。礫石器の数量と時期的なまとまりから、南九州地域における植物質食料は一様であると解釈されてきたのである。実際には、礫石器がたった一点しか出土しない場合もあれば、明らかに石器製作に用いられたと思われる資料が一定数存在する。ここに、資料の実態と先行研究とのギャップが生じる。</p> <p>そこで本研究では、より詳細な礫石器の観察に基づいた用途峻別を行い、従来とは異なる環境適応論の構築を目指す。</p>			
<b>【分析内容】</b>			
<b>(1) 分析方法</b> <p>従来は、後期旧石器時代と縄文時代に出土する礫石器の類似性からその用途が推測されてきた。しかし、近年では、より詳細な使用痕跡の肉眼観察により礫石器の機能を推定する研究が行われている（渡邊2007）。本研究でも同様の視座に基づき、肉眼による使用痕観察に重点を置く。</p>			
<b>(2) 分析①</b> <p>礫石器の用途峻別を行う基準作成の為、鹿児島県指宿市西多羅ヶ迫遺跡の資料実見を行った。当該遺跡では、100点を超える礫石器が出土しており、その礫形状、使用石材、使用痕跡などが多様である。これらの属性を総合的に評価し、礫石器の用途について、石器製作用具とより軟質な対象物の加工具の二者に大別することが可能となった（塩原2025）。また、礫石器の石材採集に際し、用途が意図されていた可能性が高い点を指摘したことも重要である。</p>			

### (3) 分析②

(塩原2025) によって作成された礫石器の観察基準を用い、南九州地域に所在する各遺跡の資料に適用した。分析対象は、宮崎平野および種子島に位置する計21遺跡・23文化層から得られた259点の礫石器である。これらに地域には当該時期の遺跡が多数分布しているものの、その多くは従来の議論にほとんど取り上げられてこなかった点に特徴がある。また、資料を悉皆的に集成した結果、これまで後期旧石器時代初頭に出土が偏ると考えられてきた礫石器について、実際には後期旧石器時代前半期を通じて一定量の出土が継続して確認されることが明らかとなった。この事実は、当該時期の生業活動や遺跡の機能について再検討を促す重要な知見といえる。

### (4) 分析結果

今回の分析によって浮彫となったのは、南九州の全ての遺跡で定着的な生活が営まれていたとは限らない状況である。上述のように、南九州地域には異なる機能を持つと考えられる遺跡がモザイク状に分布している。これらの遺跡は、偏在する資源に対応する形で残されたものと考えられよう。例えば、軟質な対象物が照葉樹林帯に伴う植物質食料であったと仮定するならば、その分布は南九州一帯に及んでいたわけではない可能性がある。むしろ、種子島・薩摩半島南部・宮崎平野の一部といった特定の地域に限られていた可能性が浮上する。

つまり、南九州地域における人類の環境適応とは、南九州全域で一様に生じた現象ではなく、偏在する資源に応じて局地的に生じた現象であったといえる。後期旧石器時代前半期の狩猟採集民は、狩猟活動を継続しつつも、地域によっては石材以外の資源に比重を置いた生業を部分的に営んでいた可能性が示唆される。

#### 【本研究における調査実績】

2026年度は、南九州地域を中心に資料調査を実施した。研究史においては、特定の遺跡を例として、南九州一帯での環境適応論が展開されてきた。今回は南九州地域の当該時期の遺跡を悉皆的に集成・調査することが可能となった。また、礫石器について、量的な評価ばかりが先行していた研究史上の課題に対して、一点ごとの詳細な観察と記述を行うことができた。

成果実績は、以下の通りである。

①塩原健「礫塊石器から考える後期旧石器時代の地域的生業－南九州西多羅ヶ迫の事例から－」、COLS 考古学フォーラム“後期旧石器時代の成立と展開”、明治大学、2025年5月18日、(口頭発表)

②塩原健「後期旧石器時代前半期における人類の地域的環境適応－南九州地域を対象として－」、石器文化研究会 第302回例会、ふれあい貸し会議室 五反田No.82、2026年1月17日、(口頭発表)

#### 【参考文献】

塩原健2025「後期旧石器時代前半期における礫塊石器の用途論－西多羅ヶ迫遺跡の事例分析を通して－」『考古学集刊』第21号、pp.1-16、明治大学考古学研究室

中村真理・藤本正和・佐藤万里江 2002「4 後牟田遺跡第Ⅲ文化層の礫塊石器類と遺跡空間の構成」『後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』pp. 369-381、後牟田遺跡調査団

渡邊貴代 2007「敲石研究の新視点－石器製作用敲石の認定基準について－」『旧石器考古学』69、pp. 13-25、旧石器文化談話会

# 明治大学阿部英雄研究奨励金実施報告書

(2025年度 研究奨励金・卒業研究奨励金)

2026年 3月 31日

ふりがな 氏名	わたなべ ふうた 渡部 颯大	所 属	文学研究科史学専攻考古学専修博士前期課程2年
研究課題	儀礼用土器の拡散から見た東国における古墳の出現 —上毛野地域出土の小型精製器種の検討から—		
研究目的	<p>報告者の研究課題は、古墳の出現過程において畿内的な祭祀行為の波及が果たした役割を明らかにすることにある。具体的には、墳墓における葬送儀礼とそこで用いる土器に注目することで、東日本における定型的な前方後円墳成立の背景として、畿内の祭祀行為の共有に表出されるような、首長間の思想・イデオロギーの共有を指摘するものである。</p>		
検討課題	<p>上記テーマの検討のため、本年度は以下の課題を設定し、分析を進めた。</p> <p>①. 上毛野地域における小型精製器種の受容過程</p> <p>本研究では、小型精製器種の受容過程を型式学的に検討することを第一の課題とした。この検討のため、畿内地域から一定の物理的距離を有していながらも、三角縁神獣鏡を多数出土するなど、古墳時代前期における畿内地域との交流も想定される地域として、上毛野地域（現在の群馬県域）を対象地域として選定した。ただし、上毛野と一口に言っても地理的・歴史的背景は多様である。そこで今回はあえて上毛野西部、榛名山東南麓にあたる井野川・烏川流域（現在の高崎市域）の資料に限定して、厳密な土器編年を構築することを目指した。</p> <p>具体的な検討の手順として、まずは基軸となる土器編年を構築した。特に本地域で定量的に見られるS字状口縁台付甕（S字甕）、東海系大型高坏、畿内系屈折脚高坏について、細部属性に基づいて詳細に分類し、組列を立てた上で、層位や共伴関係に基づきこれを検証した。この結果、古墳時代前期初頭から古墳時代前期末までを7つの段階に分けることができ、従来よりも細かいタイムスケールでの議論を可能とした。</p> <p>上記の3器種の編年を基軸編年とし、これらとの共伴関係を中心に小型精製器種の編年を検討した。特に本年度は小型器台と小型鉢・埴を主な対象とした。小型器種の分類もS字甕等と同様に、細部属性とその組み合わせによって型式を設定し、その組列を基軸編年によって検証する方法をとった。</p> <p>以上の検討から、次の結果が得られた。第一に、小型器台の波及については、Ⅰ～Ⅱ段階（古墳時代前期初頭・3世紀前半）に東海系・北陸系が波及し、Ⅲ段階（古墳時代前期前半・3世紀半ば～後半）に畿内系小型器台が波及、東海と山陰の折衷タイプがⅣ段階（古墳時代前期前半～中頃・4世紀前半）に参入することを確認した。</p> <p>小型埴についてはⅢ段階に平底のタイプが見られるものの、畿内ダイレクトの丸底タイプの小型埴はⅣ段階に見られるようになることを確認した。さらにこのⅣ段階には、畿内の中でも大和地域の小型埴をモデルに、独自化された埴が定型化し、以降本地域で定量的に見られるようになることも見出した。この埴については地域内での型式変化や分布の偏在性を検討し、「西毛型埴」を提唱した。</p> <p>以上、畿内系を中心に小型精製器種の受容過程について検討したが、当初の研究目的である「古墳の出現過程において畿内的な祭祀行為の波及が果たした役割」の解明について、特に時間的前後関係の点で検討を加えた。特に本地域最古の大型古墳である元島名将軍塚古墳と、同じく本地域最古の前方後円墳と考えられる前橋天神山古墳については、出土土器を所蔵機関にて実見し、その築造時期について検討した。</p> <p>検討の結果、元島名将軍塚古墳は報告者の編年のⅣ段階に位置付けられた。前橋天神山古墳についても、出土する器種が少なく、追加の検討が必要ではあるが、早ければⅣ段階新相、遅くともⅤ段階には成立していると考えられる。以上から、本地域において畿内要素を持つ小型精製器種の波及自体は大型古墳の築造に先行すること、そして畿内系小型埴の積極的な受容と定型的な高塚古墳の出現が歩調を合わせるかのように進むことが明らかとなった。</p>		

## ②. 墳墓出土土器の観察に基づく葬送儀礼の検討

上記で明らかにしたように、本地域における大型古墳の出現と、畿内系の小型精製器種の積極的受容は、時間的に近接して確認され、両者の間には関係性が想定される。この儀礼用土器の共有という現象が、果たして土器そのものの波及に留まるのか、あるいはそれを用いる儀礼という場面をも共有するものであるか、検討する必要がある。

そこで、本研究の第二の検討課題として、墳墓における土器出土事例に基づく葬送儀礼の検討を行った。主な対象としては、土器編年の検討と同様、榛名山東南麓地域の事例を中心に集成し、その器種構成や出土位置について、発掘調査報告書を中心に検討した。また、故地である畿内地域における墳墓儀礼についても検討する必要があるため、大和や河内の代表事例を中心に検討を進めた。

検討に当たっては、報告書に基づく分析を中心に進めつつ、上毛野では元島名將軍塚古墳・前橋天神山古墳などの大型墳や、倉賀野万福寺遺跡等の周溝墓、畿内では大和の東殿塚古墳について、それぞれの所蔵機関にて出土土器を実見し、製作技法や使用痕等について観察した。

検討の結果、上毛野地域においても、高塚古墳の成立に相前後して、畿内系の小型精製器種が墳墓儀礼に採用されることを明確にした。

## 本年度の調査実績

上記課題の検討に際し、本奨励金を活用して、特に下記の機関における出土土器の観察を重点的に行った。

・高崎市教育委員会：高崎市内出土土器の観察

①の検討のため、元島名將軍塚古墳、上中居遺跡群、倉賀野万福寺遺跡出土土器を観察し、②の検討のため、元島名將軍塚古墳、倉賀野万福寺遺跡出土土器を観察した。

・天理市教育委員会：天理市東殿塚古墳出土土器の観察

特に②の検討のため、東殿塚古墳出土土器を観察し、土器への底部穿孔や破砕、煮沸の有無について検討した。

・前橋市教育委員会：前橋天神山古墳出土土器の観察

①の検討のため、前橋天神山古墳出土の二重口縁壺を観察し、その製作技法について

・愛知県埋蔵文化財センター：廻間遺跡・岩倉城遺跡ほか出土土器の観察

上毛野地域においては東海系土器が主体となるため、東海系の小型精製器種が上毛野に波及している可能性も考慮し、①の検討のため、小型器台や小型鉢を中心に、製作技法の観察を行った。また、②の検討のため、廻間遺跡の周溝墓出土土器も観察し、東海地域における墳墓儀礼について検討した。

・このほか、本奨励金を活用し、古墳時代前期の畿内と東海の墳墓出土土器の代表的事例の検討のため、榎原考古学研究所附属博物館および松阪市文化財センターにおいても二重口縁壺を見学した。

なお、本奨励金を活用した研究成果の一部を、下記にて発表した。

・2026年1月 「儀礼用土器の共有と古墳の成立—古墳出現期の上毛野における小型精製器種の分析から—」  
(2025年度 明治大学修士論文)

・2026年3月21日 「小型精製器種の拡散・受容過程の再検討—上毛野を対象として—」, 第68回例会考古学研究会東京例会 第12回若手研究者発表会, 明治大学駿河台キャンパス (口頭発表)